



京都地域グループ委員の募集について

大図研京都地域グループ会員の皆様へ

京都地域グループでは、2025/2026 年度（2025 年 7 月～2026 年 6 月）の京都地域グループ委員を募集します。

グループ委員会では、企画を実現したり、Web サイトや出版物を作成したり、組織管理をしたりといった日常の仕事ではできない経験とともに、組織を超えた人とのつながりを得ることができます。私たちと一緒に活動してくださる方を待っています。詳しくは以下をご覧ください。

1. 募集対象 京都地域グループ会員の方

2. 募集期間 2025 年 6 月 10 日（火）～6 月 24 日（火）

3. 活動内容 グループ委員は下記にあげる担当を分担します。

グループ代表、グループ副代表、全国委員、研究企画、グループ報編集、メールマガジン、Web サイト、組織・財務

4. 応募・問い合わせ先

応募のお知らせやご不明な点の問い合わせなどは、下記京都地域グループメールまで、またはお近くのグループ委員までお願いします。

京都地域グループメール：kyoto@daitoken.com

[目 次]

京都地域グループ委員の募集について	...	1
大図研京都ワンディセミナー参加報告		
『貸本屋と新聞縦覧所と図書館と・近世近代読書装置への史眼（廣庭基介セレクション）』のお話」参加報告	永田 千晃	... 2
「京都橘大学図書館見学と交流会」参加報告：～危機感を原動力とした発展～	加川みどり	... 4
「円安対策！「2つの欧文文献提供システムを同時導入」導入の経過と成果について」参加報告	山田 奈々	... 6
「立命館大学学生による卒業論文発表会」参加報告：貴重な「学び」と「つながり」を得た卒論発表会	久野 和子	... 8
会費ご納入のお願い	...	10

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com （大学図書館研究会京都地域グループ）

URL： <https://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

大図研京都ワンディセミナー

『貸本屋と新聞縦覧所と図書館と-近世近代読書装置への史眼（廣庭基介セレクション）』のお話 参加報告

永田 千晃

廣庭先生のことは、この度の大図研京都ワンディセミナー『貸本屋と新聞縦覧所と図書館と-近世近代読書装置への史眼（廣庭基介セレクション）』のお話（以降、「今回のセミナー」と略）の講師である堤さん（日頃お呼びしている形で失礼いたします。）からのお話に幾度となく登場していて、たくさんの引き出しを持たれた魅力ある方なのだろう印象を以前から抱いていました。

私が京都大学の図書系職員として入職したのは2009年。廣庭先生は、1993年に京都大学を定年退職されたとのことで、残念ながら全く重なっていません。堤さんとは、私が入職した2009年のその年から、知人に紹介してもらい通い始めた図書館資料保存ワークショップでご縁を頂きました。

図書館資料保存ワークショップは、堤さん他図書系職員有志で2003年11月に発足された、京都大学の図書館の本の資料保存について学ぶ勉強会です。コロナ禍以降、附属図書館内での開催はお休みしていますが、図書館資料保存ワークショップ番外編と称し、図書館員を中心としたメンバーで本の修理について学ぶ会を学外で開催しています。京都大学以外の図書系職員も通われていますが、堤さんはそこでもよく廣庭先生のことや、廣庭先生と堤さんのご主人とのエピソードなどもお話しくださいます。堤さんのご主人は、今回のセミナー内で取り上げられた「アナログ司書の末裔伝」にも寄稿されていて、廣庭先生とは上司部下のご関係だったようです。廣庭先生は、写真が好き、鉄道が好き、車が好き、京都の文化にも詳しい、そしてなにより図書館、司書の仕事を愛してらっしゃったのだと今回のセミナーで感じる事が出来ました。

今回のセミナーは、2023年10月に金沢文圃閣から刊行された廣庭先生の著作「貸本屋と新聞縦覧所と図書館と-近世近代読書装置への史眼（廣庭基介セレクション）」を元に、その編集に関わられた菅修一先生と堤美智子先生から廣庭先生にまつわる、主に京都大学ご勤務時代のお話を聞くことが出来ました。廣庭先生と言えば、「大惣本」をはじめとする貸本屋のご研究。

大惣本とは、江戸中期から明治中期まで名古屋で営業した貸本屋、大野屋惣八店（略称「大惣」）の旧蔵書のことです。明治維新以降、貸本屋業は衰退し、大野屋惣八店も明治31年に廃業に追い込まれます。京都大学を含む多数の機関がその膨大な蔵書を買上げました。

菅先生からは、「アナログ司書の末裔伝」の内容に触れながら、廣庭先生が京都大学に勤務されてから、大惣本研究や執筆のきっかけとなった先輩方との出会いについてのお話を。堤先生からは、菅先生のお話に上がった廣庭先生の最初の師匠である文学部図書室時代の上司谷口寛一郎氏、附属図書館事務長だった岩猿敏生先生、同じ貸本屋研究をされていた長友千代治先生等、廣庭先生に関わられた多くのキーパーソンとのお写真をスライドでたくさん拝見させて頂きました。

廣庭先生は1948年に京都大学文学部図書室に就職されています。廣庭先生、16歳のとき。まずこの歳で京都大学に入職できるような時代であったことに驚きました。当時のお写真は初々しく、少年のあどけなさが溢れんばかり。図書室の現場ではタイプライ

ターが使われていた時代だったので、上司である谷口氏にブラインドタッチができるようにと言われ、廣庭先生は2週間でマスターされたというエピソードには、仕事を早く身に付けようとされた熱心な様子が伺えました。私なんぞ、パソコンですら今だに完全なブラインドタッチができません。タイプライターだなんて、私なら飛び上がった高さの異なるキーに指が引っかかって誤植の連続になることでしょう。

1956年に附属図書館に配置換になり、その時の上司であった岩猿先生に京大図書館報「静修」や京都図書館協会の会報の編集を任されるようになり、「書くこと」が平気になられたそうです。

今回このような場で、私も拙いながら「書くこと」をさせて頂いております。先述の図書館資料保存ワークショップの活動をする中でのここ5年ほどで書く機会を何度か頂戴するようになりましたが、それ以前の私からしたら考えられないような気がします。思い起こせば、このような機会を得るにも様々な人との出会いがあったのだと振り返ることができました。

大惣本について、最近印象深かったことがあります。昨年、京都大学の図書系職員対象にお昼休みに zoom を使ったミニ勉強会の開催がありました。京都大学附属図書館の内田栞さんによるものです。お昼休みの30分、毎回異なる図書系職員のゲストスピーカーによって体験が語られるものです。その第1回目は、主催の内田さんご自身によるお話で「附属図書館資料整備掛の事件簿 -消えた大惣本の行方-」。京都大学の蔵書印の押された図書が見つかった他大学から、その図書の来歴について問い合わせがあったことへの調査の報告でした。手がかりのひとつは、図書に押印された日付入りのハンコでした。内田さんが先輩職員に尋ねられたところ、大惣本ではないか？ということで、来歴は解明され始めます。「大惣本ではないか？」という視点で見ることのできた先輩職員の方の記憶には、きっと廣庭先生の研究活動やその成果が大きく影響していたのではないかと想像しました。

大惣本や他の貸本屋の蔵書だったものは、題せんにかかるように特徴的な黒いハンコが押されているそうです。廣庭先生はそこに興味を持たれ、不要になった小型カードにそのハンコを描き写し、ためられていたのだとか。個人的にその廣庭先生の描かれたハンコ写しがとても観てみたい思いに駆られました。一体どれくらいの量があるのでしょうか。

廣庭先生の伝えられたいことは、図書館員はパソコンやデータばかりに頼らず、実際の本にとにかく触れること、興味のある事は記録をし、それを取っておくこと、そして多くの先輩方と接すること。そのようなことで自分の研究が生きる機会が巡って来る。そのように受け取れました。

自分の好きなことを研究すること、資料を集めること、先生や先輩に尋ねること。大学図書館員は、比較的簡単にそれらを叶えられる大変恵まれた環境の中で毎日仕事ができていると改めて感じ、業務を超えて自分を活かせるきっかけは、山のようにあるのではないかと感じました。

廣庭先生と同じ時代に仕事が出来たらどんなだったろうと想像すると共に、廣庭先生と職場での日々の自分を照らし合せて考える時間になりました。

ありがとうございました。

参考文献：

アナログ司書の末裔伝：図書館員は本を目で見て手でさわらなあかんよ

「書庫掛の廣庭さん / 堤豪範」p43-44, 「廣庭先生に集う：出会いと思い出」p76-79

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ > コレクション > 大惣本
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/daiso> (2024.11.2 時点)

ながた ちあき (京都大学本部構内(文系)共通事務部総務課図書受入掛)

大図研京都ワンディセミナー

「京都橘大学図書館見学と交流会」参加報告 ～危機感を原動力とした発展～

加川 みどり

はじめに

2024 年 10 月 26 日 (土) に開催された京都橘大学の図書館見学会と交流会に参加させていただいた。地下鉄東西線の最寄り駅とされる柳辻駅から、田園風景の残る、昔はたんぼの畦道であったと思われる細い道を通りぬけ、自動車専用道路の高架をくぐり抜けると、「京都橘大学」という文字を掲げた建物が目に飛び込んでくる。キャンパスの奥の方にある図書館のドアを開け中に入ると、そこには新築建物独特の建材の香りと書庫特有の懐かしい香りが適度に混ざりあった空気に包まれた空間があった。それもそのはず、2024 年 9 月 21 日 (土) にリニューアルオープンしたばかりとのこと、懐かしいカフェで出来立てのフレンチトーストを頂くような雰囲気を感じた。

今回のプログラムは、京都橘大学情報システム部・学術事務部の中村敬仁氏より、京都橘大学の概要とリニューアル前の図書館について、リニューアルのコンセプト等の説明があり、その後、図書館内を見学し、学生食堂へ場所を移し、おやつを頂きながらの「茶話会」、その後、定番の夕食をかねた「親睦会」という内容であった。「茶話会」を設定された目的は、いわゆる飲み会となる「親睦会」には参加しにくい方々にもインフォーマルな情報交換の場を提供することとのこと。参加者 8 名中 7 名が「親睦会」に参加したが、残り 1 名の方にも交流の機会があったことは、少ないながらも大きな成果であったであろう。

1. 危機感から生まれる力

京都橘大学は 1902 年に「京都橘手藝学校」として創立、「良妻賢母」ではなく経済的にも自立した女性を育てることを目的としていたことはその当時としては珍しいことである。

1967 年に文学部のみの単科女子大学として「橘女子大学」が開学、京都大学との関係もあり、京都大学のミニチュア女子大を目指していたとのこと。宗教やオーナーなどの強力な経営母体を持たないことが同学校法人の特徴のようである。

ところが、1974 年には大学開学から定員割れが続き、資金不足による倒産報道もあり、大学全体で強烈的な危機感があり、「地域に支えられつつ」、大学運営、学生募集、等再建へ向け、文字通り教職一丸で取り組んだ結果、わずか 3 年後の 1977 年には奇跡の復活をとげた。

2005 年には「厳しい環境への危機感から、学長の権限と改革の組織を強化」し、女子大としては早い段階で「男女共学化」及び「看護学部」開設を実行、文部科学省が「学

校教育法」を改正し、学長や副学長の権限を強化したのは 2015 年であるので、時代の先を見越しての改革が現在の発展につながっていることは疑うべくもない。

改革・改組を重ね、開学当初は定員 1200 人であったが、2024 年は 9 学部 15 学科で在学 6918 人と発展している。

2. かつての図書館

1986 年 4 月に竣工された図書館は延床面積 4,987.25 m²、収容可能蔵書数 130,600 冊、蔵書冊数 68,000 冊、閲覧席数 409 席、その当時の定員が 1200 名とのことであるので、在学生の約 30%の座席数を確保、建物は研究室と一体となり、学生活動の中心地に位置していたという恵まれた環境であったためか、1996 年の入館者数は 121,331 人、貸出数も大学ランキングでは上位 10 位に入っていたとのことである。

大学が「社会の変化に対応」するため、「積極的に学部学科の新設・改組等の改革」が行われるに伴い、蔵書数も増え、2004 年の蔵書数は 16 万冊になったため、2005 年には集密書架を設置、視聴覚資料を図書館外の情報メディアセンターに移管するなどの改革が行われた。

2006 年頃よりその概念が日本でも紹介され、図書館業界で設置がすすめられた「ラーニング・コモンズ」²⁾については、2015 年から図書館内のみでなく、大学全体に必要な場所に「ラーニング・コモンズ」を設置するという方針で取り組まれている。

大学改革に伴い学生数は 1200 名から 6000 名へ増加したにもかかわらず、入館者数はほぼ同数の 12 万人程度と伸び悩み、さらに 2019 年からの新型コロナ禍により入館者数が激減したことに対する危機感から、開学以来初の大規模にリニューアルが実施された。

3. リニューアルした図書館

リニューアルにあたって、2022 年に利用者に対してアンケートが行われた。キャンパスの入り口付近は発信の場とし、図書館のあるキャンパスの奥の方は「追求の場(=インプット)」とし、「図書館としての原点に回帰」・「悩んだ時に立ち帰る・物事の根源を学ぶ場」とし、コンセプトを「ACADEMIC ROOTS」と設定された。

図書館内も「細長く雁行」した施設の特徴から、「奥に入り込むほど本に囲まれる森のような空間」とし、書架の間を歩くだけで「たくさんの本に出会える」よう書架の配置に工夫が施されている。

1 階はアクティブゾーン、2 階はリラックスゾーン、3 階 4 階はクワイエットゾーンとゾーニングされ、それぞれの場所にふさわしい什器が配置され、色遣いも上に行くほど濃い色使いとなっている。

2023 年度末には書庫棟が新設され、収容冊数 563,000 冊、蔵書数 321,000 件、年間受入数は 115,000 件となっている。

リニューアル後 1 か月であるが、2023 年度の同期間と比較し、平均入館者数は 150%となっている。ちなみに、10 月 1 日には 965 人と 1000 人に迫る勢いであったとのことである。リニューアル直後のご祝儀数字といわれていたが、1 日で在学学生数の約 1/7 が来館したというこの数字は驚くべき事であろう。

おわりに

京都橘大学の強みは危機感を共有したことにより、教員・職員・卒業生が同じ目標に向かって協力する一体感が生まれ、「人との距離が短い」ことではないだろうか。中村氏が他部署や同窓会の方々と気さくにお話される光景をみて、その一端を垣間見た気がした。逆境こそ最大のチャンスであると肝に銘じて、精進し業務を遂行したいと思う。

たくさんのアイデアやエネルギーを得ることができたプログラムであった。本プログラム開催に際し、ご尽力いただいた方々に深く感謝する。

注・参 照 文 献

- 1) 中村敬仁. 京都橘大学図書館リニューアル紹介大 図研京都ワンディセミナー当日配布資料
- 2) 米澤誠. CA1804 – 研究文献レビュー：学びを誘発するラーニング・コモンズ
<https://current.ndl.go.jp/ca1804> (accessed 2024-11-30)

かがわ みどり (神戸松蔭女子学院大学学術情報センター (原稿受理時点))

大図研京都ワンディセミナー

『円安対策！「2つの欧文文献提供システムを同時導入」導入の経過と成果について』
参加報告

山田 奈々

令和7年1月26日にハイブリッド開催された大図研京都ワンディセミナー『円安対策！「2つの欧文文献提供システムを同時導入」導入の経過と成果について』に参加した。講師の伊藤民雄氏は、実践女子大学図書館において2018年度に図書館予算作成担当となられてから、コスト削減しながら、なるべく多くの雑誌にアクセスできる環境を提供されている。利用者の利便性向上と円安対策のために実践女子大学図書館に2024年度に新規導入された2つのサービスの概要について述べる。

1 RapidILL

- ・外国語文献がPDFファイルで約24時間以内に入手できる
- ・世界約1,000機関との相互協力 (PDF文献複写のみ)
- ・NACSIS-ILLとは別のシステム (文献複写の依頼先をNDLにする手順と同様のイメージ)
- ・依頼先は自動割り当て
- ・年間経費は図書館予算、定額制で年額65万円 (PDF文献自体の料金は不要)
- ・代理店は株式会社サンメディア
- ・利用者には通常の文献複写として申し込んでもらい、図書館員がRapidILLのシステムを用いて依頼し、届いたPDF文献のリンクを利用者に提供している。
- ・利用者から料金を徴収していない。
- ・RapidILL受付対象として5誌を登録している。作業は、電子ジャーナルから文献をダウンロードし、ファイル名を依頼番号にしてアップロードするだけなので、数分で完了する。
- ・課題等：ドイツ語、フランス語の文献カバー率が低い。海外から提供された冊子体をスキャンしたPDFファイルが雑なことがある。著作権法や雑誌ごとのILL提供可否等の契約内容を確認したうえでの運用が必要。

2 Article Galaxy Scholar

- ・図書館員の介在なしで ReprintsDesk の外国語文献 PDF を手配する仕組み
- ・教員がリンクリゾルバーに DOI を入力し、メールアドレス認証により外国語文献 PDF を教員自身が注文し、そのメールアドレス宛てに最短 2 分で PDF 文献のリンクが届く。
- ・教員から料金を徴収していない。
- ・年間経費は図書館予算、年額使用料 75 万円＋個々の PDF 料金の合計（1 か月 30 件程度として 300～400 万円）
- ・代理店は株式会社紀伊國屋書店
- ・教員以外はサービス対象外としているため、メールアドレス認証時にエラーとなり、ILL へ誘導される。
- ・課題等：本来はリンクリゾルバー（360Link）から契約電子ジャーナルとオープンアクセス誌の有無を自動判定したうえで Article Galaxy Scholar の注文に進む仕組みだが、360Link の相性が悪いためか、大半が間違った判定となる。事前に教員を 1 人ずつユーザー登録する必要がある（まとめて登録する場合は業者に依頼する必要がある）。図書館員が介在せずに注文するため、利用状況をチェックする必要がある。

講師からは、RapidILL の弱い部分を補えるサービスとして Subito（ドイツの文献提供サービス）を以前京都大学がお使いではなかったかという京都ワンディセミナーらしい問いかけがあり、参加者から情報提供があった。Subito については、現在は京都大学でも利用されていないが、以前は PDF ファイルで届いた文献を紙に印刷して利用者に提供していた。料金が月締めの外国送金という点以外は便利だったとのことである。

文献提供サービスに関しては、さらに実践女子大学図書館において 2020 年から 2021 年までの 2 年間、文献提供システム DeepDyve を一部の教員と試行した事例についても紹介された。DeepDyve は 2 万誌近くの論文が読み放題だが、印刷やコピー＆ペーストが不可であり、使い勝手がよくないという教員評価だったそうだ。請求書払い不可のため、業者に支払い代行を依頼する必要もあった。

講師の伊藤氏は、いつも惜しみなく与える方という印象だ。伊藤氏の著作の一つである『インターネットで文献検索』を初めて拝見したときから、その気前の良さに私は驚いてばかりいる。それは講演でも同じで、今回の講演から 1 か月が経過した頃に、講師から参加者に対して、文献提供サービス Arrow の導入について検討を始めたという最新情報とともに、他の類似サービスやアグリゲーターのカバー範囲を示す図が届けられた。その昔、凄腕ギタリストのアラン・ホールズワース氏は、教則ビデオを制作したものの、秘技を見せすぎたことを後悔したという逸話があるが、伊藤氏はそのような後悔とは無縁の方なのだろう。別の凄腕ギタリストであるエドワード・ヴァン・ヘイレン氏は、ホールズワース氏の演奏をコピーしようとしたところ手の大きさが足りず、それを補うためにタッピング奏法（ライトハンド奏法）が生まれたという逸話がある（諸説あり）。他人の仕事を見せてもらい、それが良いと思ったら、自分の仕事でどう活かすか、ということなのだと思う。あなたはあなたの所属先にマッチした奏法を編み出せそうですか？

やまだ なな（青森県立保健大学附属図書館）

大図研京都ワンディセミナー

『立命館大学学生による卒業論文発表会』参加報告
貴重な「学び」と「つながり」を得た卒論発表会

久野 和子

今回、立命館大学文学部の私の図書館情報学ゼミの学生2名が、12月に提出した卒業論文の研究内容について発表をさせていただきました。卒業前で忙しい学生たちの都合に合わせて、2月24日（月）祝日の貴重な時間をいただきましたこと感謝いたします。

立命館大学内の会場にはオンライン参加のメンバーの方たちを含め、多くの社会人の方々に囲まれて、普段は元気の良い学生たちも終始かなり緊張した様子でした。開会挨拶のあと、「立命館大学図書館研究会」（通称「りっとけん」）副代表の学生から、「りっとけん」の概要と活動内容についてパワーポイント資料を使った説明がありました。卒業生もおられる前で「りっとけん」の活動をしっかり継承できていることをお知らせでき、「つながり」を確かめられたのは、とてもよかったと思います。

学生2名による発表はそれぞれ45分間、質疑応答が各25分間でした。発表の概要は以下のとおりです。

<発表①>

発表者：立命館大学文学部人文学科日本文学研究学域 日本語情報学専攻 4回生
辰巳晴菜（立命館大学図書館学生ライブラリースタッフ（LS）、
「立命館大学図書館研究会」メンバー）

タイトル：立命館大学図書館の視覚障害者等支援の現状と展望

～学生ライブラリースタッフによるテキストデータ化サービスを中心に～

要 旨：立命館大学図書館では視覚障害等をもった障害学生支援としてテキストデータ提供サービスを10年以上行っている。卒論では立命館大学図書館のテキストデータ提供サービス開始からの本学の歴史的背景を明らかにした上で、今現在のテキストデータ作成作業の最前線について、実際に作業をおこなうLSの視点から詳述した。さらに、関係者へのヒアリングとアンケート調査を実施し、視覚障害者支援の意義と課題について検討・考察した。

<発表②>

発表者：立命館大学文学部人文学科日本文学研究学域 日本語情報学専攻 4回生
川本かおり（「立命館大学図書館研究会」前代表）

タイトル：コロナ禍における図書館報道

—全国紙の図書館に関する記事を比較して—

要旨：コロナ禍において報じられた図書館に関する全国紙の記事について、内容と経年変化に焦点を当てた分析を実施した。結果として、新聞各社それぞれが注目して報じる図書館の側面的特徴に言及したほか、COVID-19による影響の強弱とともに広く図書館が担う機能や多様な活動への関心が移り変わったことが分かった。そして異常事態下の社会で図書館が果たす役割や本質的な意義へ向けられた社会的期待の一端を明らかにすることができた。

質疑応答については、貴重なご指摘やご助言をいただき、学生たちも勉強になったと思います。また、参加者や卒業生の方々とあらたな「つながり」を得ることができたのは大きな収穫でした。私自身もただ単に学生を信頼するだけでなく、学生による先行研究調査を厳しく検証したり、調査方法についてよく確かめたりすること、多くの司書の方々の意見や助言をもらうことがあらためて大切だと認識しました。

最後に、ご多忙の中この卒論発表会を企画運営してくださり、このような貴重な学びとつながりの機会をいただいた京都地域グループの皆様に心から感謝のお礼を申し上げます。

くの かずこ（立命館大学文学部）

◇ 会費ご納入のお願い ◇

会員みなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017 年度(2016 年 7 月～2017 年 6 月)より、大学図書館研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館研究会事務局へご納入いただいております。また、2023/2024 年度臨時地域グループ総会にて 2024/2025 年度より京都地域グループ費が 0 円になることとなりました。

2024/2025 年度より会費は、

¥5,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥0)/年度です。

※2023/2024 年度までの会費は¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)/となります。未納の場合につきましては速やかに納入いただきますよう何卒よろしくお願いいたします。

【振込先】

郵便局 00190-2-79769 大学図書館研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019

■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキュウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)までご連絡ください。